

阿蘇市読書感想文コンクールは、情操、探究心、知識の向上など大きく人生の支えとなる読書の推進のため、市が毎年行っているもので、市内ほとんどの小・中学校の児童生徒が参加しています。また、高校生・一般の部においても、募集により多くの作品が寄せられました。

本年度、見事「市長賞」に輝いた3作品をご紹介します。

## 「市長賞」 受賞作品紹介

豚トントンの一生を読んで

阿蘇西小学校 六年 鶴本 歩美

私は、豚肉が大好きです。ご飯のおかずにも、よく出てきます。この前も、家族でトンカツを食べました。すごくおいしかったです。

この本の表紙には、「豚トントンの一生」という題名の他に、「生まれて、育て、そして食べられるまで」とも書いてありました。私はそれを見て、私が大好きで、いつも食べている豚肉が、もとは生きている豚であるということ、あらためて感じました。考えてみれば当たり前のことだけど、普段は、全然考えても、気にもしていないことでした。だから、この本を読んでみようと思いました。

この本は、主人公のトントンが生まれるところから始まり、その成長の様子を、ナレーターみたいに読者に語りかける形で書いてありました。表現の仕方が、友だちと話すみたいに書いてあり、とてもおもしろく、すらすらと読めました。また、子豚の成長にあわせて人が世話をする様子や、子豚の気持ちなどがくわしく書いてあったので、初めて知ることがたくさんありました。

豚トントンの一生  
本山ちさと 作、海苑社

例えば、子豚は、半年で百キログラム以上になることにびっくりしました。そして、昔は、残飯をえさとしてあげていたけど、残飯に混ぜていたビニールゴミなどを豚が食べて死んでしまい、今は、豚用のえさを成長にあわせてあげていることを知りました。

また子豚は、生まれたときから歯が生えていて、母豚のおっぱいにかみつくので、生まれてすぐに歯を切られてしまうことや、子豚同士でしっぽにかみつくので、しっぽも切られてしまうことも知りました。歯やしっぽを切られてしまっうなんて、痛そうでかわいそうだと思います。でも、かまれてけがをすると、そこからばい菌が入って病気になってしまうので、仕方がないのかなとも思いました。

私が始めて知ったことの中で一番心に残ったことは、豚は生まれて少ししたら、成長によって種豚と肉豚にわけられ、肉豚は去勢をさせられるということでした。

トントンも、種豚にするか肉豚にするか考えられて、ももが少し細いという理由で肉豚になり、去勢されてしまいました。生まれてすぐに自分の運命が決まってしまうなんて、きびしいなと思いました。

このときに、場長さんが、「家ちくもベツトも、人間の事情で去勢される。」とつぶやいたので、本当は、みんな自然のままに育てたいと



思っているんじゃないかなと思いました。場長さんたちも、悲しい気持ちをもって仕事をしてくるんだなあと思いました。

この本を読んでいると、五年生の時に学校で、アイガモ農法のためのアイガモを育てたことを思い出しました。アイガモのひなが来たときは、とてもかわいかったです。二十羽のひなたちの世話をするのは、とても大変だったけど、みんなで力を合わせてがんばりました。でも、一羽のひなが死んでしまいました。ちゃんと世話をすればよかったと思いました。その後も、四羽のアイガモが死んでしまいました。すごく悲しくて、生き物を育てるということは、いかに大変かということがよくわかりました。でも、アイガモたちが大きく成長していくのを見ると、すごくうれしかったです。

しかし、ひなの時から育ててきたアイガモをしめる日がきたときは、とても悲しかったんです。本当は、カモしめをするのが、とてもいやでした。でも、カモしめのお世話をしてくださった五嶋さんが、「最後に、肉にして食べさせてやらなん。」と話されたのを聞いて、心の中で、「ありがとう。さようなら。」と言って食べました。

これまで、豚のことはよく知らなかったけれど、豚は、人と同じように兄弟と遊ぶのが好きだったり、トイレの場所を覚えたり、日焼けをしたりするということを知って、かわいいなあと思いました。場長さんたちも、かわいいと

思っていて育っているんだろうなと思いました。だから、私と同じように、トントンの命をいただく日は、つらかったと思います。

場長さんが、「涙ではなく、感謝だ。」と言ったのが、五嶋さんと似ているなと思いました。命を育てている人は、命の大切さを本当に知っているんだなと思いました。

私はこの本を読んで、食べ物を食べることに、もつと感謝をしなければならぬと思いました。生き物は、他の生き物の命をもらって生きています。そうやって、ずっと大昔から、命はつながっています。トントンの命も、私たちももらって生きています。トントンだけでなく、他のたくさん生き物の命をもらって生きています。だから、

「いただきます。ごちそうさま。」という言葉に、もつと感謝の気持ちをこめて言っていきたいと思います。そして、命を大切にしていきたいと思います。



「戦場から生きのびて」を読んで

阿蘇北中学校 三年 小糸 咲月

私は今まで、戦争は過去のものだと思っと思っていました。それは今、この平和で豊かな日本で暮らしている人達なら、誰でも思うことだと思えます。でも、世界中には今なお戦争の中を生きている人達がたくさんいます。この本の著者であるイシメール・ベアさんがその一人です。彼は十二歳から十五歳まで激しい内戦を闘った少年兵でした。この本には少年兵士が、たくさん人の優しさで立ち直っていくようすが彼自身の手によって描かれています。

一九九三年一月。この日から、彼の人生は変わり始めます。彼の住む所にも戦争がやって来たのです。イシメールさんは、家族と離れ離れになってしまいました。そのときから彼の戦火から逃れるために逃げまどう生活が始まります。食べ物が無く、お金は無用の長物と化しました。村から村へ渡り歩く日々が続きます。森で過ごすこともありましたが、それは孤独との戦いでした。けれど、イシメールさんに一筋の希

戦場から生きのびて  
イシメール・ベア 著、  
河出書房新社

望がうまれます。彼の家族を見かけたという人に出会ったのです。喜びに満ちた気持ちで丘をおりました。家族はこの先の村にいるのです。そのときでした。銃声が鳴り響いたのです。家族のいる村が襲撃された瞬間でした。そして彼の命を奪った反乱軍に対する憎しみは彼が少年兵士になる道をつくってしまうのでした。

彼の戦争は私の想像をはるかに越えていました。家族を殺した反乱軍への憎しみや怒りによって彼は多くの人間を殺しました。とても私と同じ歳くらいの子供には見えませんでした。でも、生き延びるための食べ物を手に入れるためには軍隊に入るしかなかったのです。家族の死の報復のため、生き延びるため、軍隊に入らなければいけないなんて本当に辛くて悲しいし、人を殺した過去をまだ子供なのに、これから一生背負って生きていかなくてはいけなくて、本当に苦しいと思いました。

「ぼくの現実はいつも『殺すか殺される』かだった」

この短い文章だけで戦争の激しさが伝わってきます。戦場で、彼は友を失いました。そして、人を殺すことへのためらいも、罪の意識も失ってしまいました。自分達は反乱軍とは違う、わけもなくやたらと人殺しをするあの人間のクズどもとは違うのだ。自分のやっていることは正しい、彼はそう思っていました。戦争は人の心まで変えてしまいます。最後まで自分の

していることが正しいと思いつながら戦い続けます。でも、どちらが正しいということはなく、ただ殺し合いをしているだけです。そして、悲しいことはどんなにたくさん流れても、勝利してしまえば、また新たな欲が生まれ、また戦争をしようということ。人の心は戦争によって変わり、人を信じることや、お互いを思いやれる余裕を失ってしまうことです。

そんな彼にも、人生を変えるチャンスが訪れました。リハビリテーションセンターへ行くことになったのです。初めのころは、反乱軍の兵士に出会い乱闘騒ぎを起こしたりしていました。が、看護師のエステルさんに心を許し始め、やがて彼は人間らしさを取り戻すことができました。そして彼は伯父さんの家族になり、社会復帰を果たします。

私はこの本を読んで、今の世界の現実を知りました。イシメールさんは、普通の男の子でした。戦争は突然訪れ、彼の家族や友達を奪い、彼の心に大きな傷跡を残しました。私は、世界で起きている戦争が、こんなに恐ろしいとは思いませんでした。彼の体験を知って、戦争は人の命を奪い、生き残った人にも一生消えない心の傷を残すんだと分かりました。彼が少年兵になったことは間違いだっただと思うけど、周りにそれを止めてくれる人もいなくて、生きるためにはそうするしかなかったのです。でも、人を殺すことや傷つけることが間違いだと分かっている、彼のような状況に置かれたら、どんな

に普通の子供であっても、銃を握って平気で人を殺すようになってしまう、それが戦争の一番怖いところだと思いました。日本は、他の国よりも戦争の悲惨さをよく知っている国だと思えます。毎年様々な戦争に関する番組があつていり本もたくさん出ています。中には少し怖い内容もあるけど、見るべきだとも思います。なぜなら、真実を知らなければ、平和のありがたみに気づけないからです。そして、たくさんの方が、イシメールさんのような少年兵士への理解を深めてほしいです。日本の平和だけではなく、世界が平和になるのが一番の望みです。私はこの本によって、もっと世界について知らなければならぬと気づかされました。私はこれからもっと、世界の戦争や日本の戦争について勉強していきたいです。

ここ一食卓から始まる生教育  
西日本新聞社 佐藤 剛史 著、  
西日本新聞社 美智子 著、

ここ一食卓から始まる生教育、  
江藤 裕子（社会人）

今年の夏、職場の研修会でこの本と出会いました。大きなスクリーンに写しだされた一つ一



つの言葉には、とても深い意味があり、大人への大切なメッセージが込められていました。気が付けば会場にいるほとんどの人が涙を流し、スクリーンに釘付けでした。その中は子を持つ親の方が多かったのだと思います。「生教育」これは子どもだけではなく、大人も一緒に考え、見つめなおしていく大事な教育だと思います。性を大切にしようと思えば、生が大切になりません。性教育は生教育です。生を大切にすれば、食が大切になります。生きることは食べること、食べることは生きることです。この教育は学校ではなく、家庭の食卓にあるのだと思います。家庭の食卓はまさに人間の始まりであり、一番大切な教育の場だと私は思います。「性」「生」「食」のつながりを改めて考えることができました。

「性」これは命の重さを知る大切な教育です。人は皆、性から命をいただき、この世に生を受けます。母親が自分の命を掛け、愛おしい我が子をこの世に誕生させてくれます。大事にされた性を受け、生まれてくる赤ちゃんはともあたたかく、みんなにたくさんのパワーを与えてくれます。性はあたたかな感動と喜びを体感することが出来ます。しかし時に反面では冷たく悲しい現実をつきつけられることもありま。たくさんの思いや感情を持つことができる「性」をどうか自分を守っていくことと同じくらい大切にしてほしいと思います。

「生」これは一人では成り立つことが出来ま

せん。人との支え合いや助け合いを通し、生きる力を身につけていく大切な教育です。いろんな人との出会いやふれあいがあり、初めて自分の感情や思いが生まれるのだと思います。自分と合う人、合わない人がいるからこそ人生は楽しいんだと思います。「生」の原点は、お父さんお母さんの愛だと思います。乳児には肌を離さないで、幼児には手を離さないで、小学生には目を離さないで、思春期の子どもには心を離さないで、大人になるまでの道のりを見守ってほしいと思います。

「食」これは性から生へ、生から食へとつながっている大切な教育です。そしてまた、愛を知ることも出来ます。食事は何を与えるかだけではなく、どのように与えるかが大事なことだと思えます。家庭の食卓が子どもの身体と心を育てます。食べることをどうでもよくしてしまうと、生きることをどうでもよくしてしまいます。食の行動は生きていくことと連鎖していると思えます。体の空腹も心の空腹も家庭のあたたかな食卓に満たすものがあると思えます。愛は口から入っていきます。「食」の素晴らしさをもっともつと伝え、たくさんの子どもたちに愛を食べて育ててほしいと思えます。

この本を読み、自分の生き方を見つめなおしました。私には二才の息子がいます。しかし事情があり、父親とは離ればなれで暮らしています。そんな中、さみしい思いをさせないよういろんなどころへ連れていったり、たくさん楽し

い思いをさせようと毎日必死でした。でもこの本を読み、一番大切にしなければいけないこと、愛のある場所を知ることができました。食べることの楽しさや、そこで生まれる笑顔や安心感、当たり前にとっていた食事を一から考えなおしてみると、自然と今まで以上に息子の笑顔が増え、家族の会話も増えました。同時に、誰かが喜んで食べてくれる幸せをも自分自身感じられるようになりました。今自分がこうして元気に過ごせるのも家族の愛、まわりの協力があるからだと思えます。こんな風に考えられるって本当に幸せです。私の仕事は給食を作ることです。明日からも、子どもたちのたくさんの笑顔のために最高の職場の方々と、おいしい給食を作っていきます。

#### 〈審査員講評〉

市長賞の三点は、審査委員全員が高く評価した作品で、いずれも「命」や「生きる」ということに真摯に向かい合った、素晴らしい感想文です。他の作品も全て文集にして発行しましたので、図書館でぜひ読んでいただきたいと思えます。

この読書感想文を読んで、私も書いてみよう、応募してみようと行動に移される方が増えることを期待しています。

審査委員長 中川 寛

委員 田尻 明子・西村 正敬

宮本 誠一・石本 明史